

西富の屏風

八柳 修之

小田急百貨店が湘南ゲートと改装され市民図書館が入ったので便利になった。「藤沢の文学」（北沢瑞史著 名著出版）という面白そうな本を見つけ読んだ。最初に藤沢つながりで出て来た地名は「更級日記」（平安時代 康平元年頃・1058）の中ににしとみの屏風があるという記述であった。

にしとみといふところの山、絵よくかきたらむ屏風をならべたらむやうなり。かたつ方は海、浜のさまも、よせかへる浪のけしきも、いめじうおもしろし。



広重 東海道五十三次藤沢宿



境川奥田橋付近から見た駒立山

この文の「にしとみ」とは現在の藤沢市西富である。西富の屏風を描いた絵は、広重の東海道五十三次藤沢宿に見られる。江ノ島一の鳥居付近から見た風景、背景の小山は遊行寺である。この浮世絵は1832年～33年頃に描かれたもので、菅原孝標の女（むすめ）が訪れたころ遊行寺はなかった。背後の小山、件の西富の屏風は随分とデホルメされている。絵に描かれたような屏風を並べたような山、片方は海という描写は、当時はまだ障害物がなかったとしても、現在の藤沢橋辺りから見る限り想像できない。さらなる疑問は、「かたつ方は海、浜のさまも、よせかへる浪のけしきも、いめじうおもしろし」である。境川が潮の干満の影響を受ける干潮河川であったとしても、西富からは海や浜の様子は見られない。それはさておき、どんな道を辿って菅原の孝標の女は西富へやって来たのであろうかウォーカーとしては興味のあるところである。

「更級日記」の作者は菅原孝標の女（たかすえのむすめ）は、寛仁元年4年（1017）、に父が上総介に任ぜられて東国に下った。寛仁4年（1017）、13歳の時、父の任期が終り帰京した。9月3日に上総国府（千葉県市原市）を出発し、下総・武蔵を経て相模に至り、12月2日に都に到着している。この日記は当時書かれたものではなく、作者が晩年の52～53歳のころ、少女時代の旅行の思い出を記したとされているので記憶違いもあろうとされている。

藤沢という地名が初めて登場するのは、「太平記」（建徳2年頃・1371）の巻十、鎌倉合戦で、300年もの後である。「村岡、藤沢、腰越、十間坂、五十余箇所火をかけたししかば、武士東西に馳せ違ひ、貴賤山野に逃げ迷う」。この場面は、正慶2年（1333、新田義貞が軍勢を率いて、鎌倉の北条氏を攻めのぼる場面である。更級日記の頃には藤沢という地名は存在しなかった。

「神奈川県史通史1」（1981）竹内理三監修に「想定さらしな日記道程」という地図（末尾掲載）がある。ルートの説明がないが、図を見る限りこのルートは境川と交差しており、西富を歩いたことは想像できる。

地図中に美奈の瀬河（稲瀬川）見越ヶ崎とあり、すでに見た万葉集の歌にある美奈の瀬河である。（拙稿「万葉集に詠まれた鎌倉の地」HP 掲載）

再び前に戻って、屏風のような丘陵がある所、海を見渡せる所がないか。

横浜市磯子区にある京急「屏風ヶ浦駅」近くの海岸とする説（金子雄次）もあるが、JAXA の主任研究員、中野不二男氏の地球観測衛星から解析した相模湾の古代、中世の海水準の研究である。結論からいうと西暦700年代の海水準は現在よりも7mほど高かったという。「屏風をたてならべたらむやうな」山が見える場所は海辺である。それも波打ち際が見えるほど海に近い。そこで中野は、屏風は新林公園の駒立山ではないかという。確かに駒立山からは海は見えるし、境川の水量は柏尾川と合流し、現在のような堤防がなかったので、氾濫原は広がった。駒立山付近まで西富と呼んでいたならば、中野の推論は成り立つが無理があるような気がする。遊行寺の裏には西富貝塚（縄文後期）、同じような古墳が新林公園から発掘されている。

にしとみといふところの山、絵よくかきたらむ屏風をならべたらむやうなり。かたつ方は海、浜のさまも、よせかへる浪のけしきも、いめじうおもしろし。この文は句読点がついており二つの部分から成り立っている。菅原の孝標の女は、西富からそのまま京へ向かったのではなく、西富の後、境川を舟で下って、あるいは江の島道を通り江の島詣へ行ったと考えられないか。菅原孝標女は当時13歳、しかも、その記憶をもとに「更級日記」を書いたのは52~53歳、江ノ島へ行ったことを忘れてしまったのか、あるいは江ノ島へ立ち寄ったことを書くのに何か不都合があったと解釈できないであろうか。また、菅原孝標の女が西富の屏風を見たのは、当時13歳、満で言えば12歳である。私に12歳の孫娘がいるが、しゃがんで孫娘の目線から見ると西富の屏風は高く見えたと考えられる。そんなことを想像しながら、歩くとウォーキングも楽しくなる。 完

参考引用文献：「藤沢の文学」北沢瑞史 名著出版 「神奈川県史 通史1

「日本の聖地文化」鎌田東二編中、第三章 相模湾の海水準と宇宙人文学 中野不二男 創元社

